

ネヘミヤ記7-9章「神の民の固め」

1A 系図の記載 7

1B 町の警備 1-4

2B 最初の帰還 5-68

3B 礼拝への準備 69-72

2A 律法の朗読 8

1B 律法の理解 1-12

2B 律法の実行 13-18

3A 神への告白 9

1B 神への礼拝 1-5

2B イスラエルの歴史 6-37

1C 主の真実に応えない民 6-31

2C 懲らしめの中にある民 32-37

3B 盟約 38

本文

ネヘミヤ記7章を開いてください。私たちは、ユダヤ人たちが城壁の工事を五十二日間で完成させたところを読みました。その後の話が7章以降に書かれています。城壁が建てられたから、それで完成したわけではありません。大事なものは完成したものを、如何に保持していくかであります。ネヘミヤ記のテーマ、「神の民の守り固め」であります。その固めることについて学んでいきます。

1A 系図の記載 7

1B 町の警備 1-4

7:1 城壁が再建され、私がとびらを取りつけたとき、門衛と、歌うたいと、レビ人が任命された。7:2 私は、兄弟ハナニと、この城のつかさハナヌヤとに、エルサレムを治めるように命じた。これは、ハナヌヤが誠実な人であり、多くの人にまさって神を恐れていたからである。7:3 私はふたりに言った。「太陽が高く上って暑くなる前に、エルサレムの門をあけてはならない。そして住民が警備に立っている間に、門を閉じ、かんぬきを差しなさい。エルサレムの住民のうちから、それぞれの見張り所と自分の家の前に見張りを立てなさい。」7:4 この町は広々としていて大きかったが、そのうちの住民は少なく、家もまだ十分に建てられていなかった。

城壁のとびらが取り付けられた時に、興味深いことに門衛と歌うたいとレビ人が任命されています。おそらく、この任命はエズラなど、祭司たちが行ったのでしょうか。彼らは、元々、神殿の門において門衛や歌うたいとして奉仕していました。けれども、今、エルサレムの町の城壁そのものに、単に一般のイスラエル人の門衛を置くのではなく、レビ人の門衛を置き、さらに歌うたいも置いた

のです。したがって、エルサレムの出入りには主を賛美する声や音楽が聞こえていたはずでしょう。

とても、興味深いことです。ネヘミヤは、エルサレムの町全体が神によって守られるもの、そして神を賛美することによって守られるものであることを知っていました。覚えていますか、ヨシャパテが圧倒的に優位な数の敵と対決する時に、レビ人を最前線に出して神に賛美をさせました。すると敵が混乱したのです。賛美には力があります。そして、将来に、私たちは天からのエルサレムを待ち望んでいます。天のエルサレムにおいては、十二の門があり、そこには御使いが立っていました(黙示 21:12)。その都全体が聖なるものであり、外と内を区別するものでありました。

ネヘミヤは、外からの敵に対する警戒を緩めていません。城壁ができたから安心ではないのです。まず彼は、兄弟ハナニと、エルサレムの町のつかさハナヌヤにエルサレムを治めるように命じ、彼らが朝早く門を開けることのないように、さらにイスラエル人が警護をしている間に門を閉じなさいと言いつけました。警護は、工事をしている時と基本的に同じで、エルサレムの住民が行い、自分の家の前に見張りを立てさせました。すべての者たちがそれぞれの場で警護に当たります。

私たち神の聖徒たちは、霊の戦いにおいて勝利するだけでなく、その勝利を保持する戦いの中にいます。パウロはこれを、「堅く立つ」という言葉で言い表しています。「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武器をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。・・(エペソ 6:13-14)」

そして私たちは、イエス・キリストの福音をしっかりと保ち、守る義務があります。「あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。(2テモテ 1:13-14)」せつかく、福音によって、神の力によって救われたのに、その福音を死守することからいつの間にか離れていき、他のことを行なっている、ということがしばしば起こります。福音から離れさせようとする力が、ものすごく強く起こります。その敵の策略は巧妙であります。私たちのすることは単純です。頑固に福音の教えの中に立つことです。初めに与えられた確信を、忍耐をもって保持することです。

そしてここで、ネヘミヤが兄弟のハナニだけでなく、この城のつかさハナヌヤにエルサレムを治めさせている理由が、彼が誠実であり、神を恐れているからというものは覚えておくべきです。誠実というのは、忠実だということです。神の家、いや地上の家においてもそうですが、この二つの資質が治めることのできるものです。忠実な人です。能力がある人ではなく、自分に与えられた能力を、どんな小さなことであっても誠実に、忠実に用いて、主に仕えているかどうかにかかっています。それから、神を恐れることです。人がどう見ているのか、人をどのように喜ばせるのか、ではなく、神になんと言われているのか、神が命じておられることを自分が行っているのか、また人が見ていなくとも、悪から身を避けているか、という資質が問われます。

2B 最初の帰還 5-68

7:5 私の神は、私の心を動かして、私がおもだった人々や、代表者たちや、民衆を集めて、彼らの系図を記載するようにされた。私は最初に上って来た人々の系図を発見し、その中に次のように書かれているのを見つけた。7:6 バビロンの王ネブカデネザルが引いて行った捕囚の民で、その捕囚の身から解かれて上り、エルサレムとユダに戻り、めいめい自分の町に戻ったこの州の人々は次のとおりである。7:7 ゼルバベルといっしょに帰って来た者は、ヨシュア、ネヘミヤ、アザルヤ、ラアムヤ、ナハマニ、モルデカイ、ビルシャン、ミスペレテ、ビグワイ、ネフム、バアナ。イスラエルの民の人数は次のとおりである。

私たちは、エズラ記 2 章において帰還民の系図を読みました。クロス王の布告によって、総督ゼルバベル率いる帰還民が、到着後に彼らが確かに、アブラハムの子孫、ユダヤ人なのだという証明のための記録でした。その時から 90 数年経っているのですが、この同じ記録を 7 節からこの章の最後まで書かれています。そして今のユダヤ人が確かに、この系図の中にいる者たちであることを確認したのです。エズラ記 2 章とネヘミヤ記 7 章の系図は、多少のずれがあります。人数や人の名前が少しずれています。けれども、そこで途中で名前は判明したであるとか、北イスラエルの十部族の人々が加えられたであるとか、古代の文献ではそうした修正がなされたという但し書きなく行われるので、大きな問題ではありません。

初めに、7 節でゼルバベルと十一人の指導者の名が書かれています。イスラエル十二部族を代表しているのでしょう。ここにいるネヘミヤは、90 年上の前の系図なのでこのネヘミヤとは違います。そして 8 節以降に氏族また家族の人数が書かれています。26 節以降に、町々にいる人々の人数があります。38 節のセナヤという町が 3930 人と際だっています。そして 39 節以降に祭司の氏族の人数があり、43 節にレビ人、44 節に歌うたい、45 節に門衛の氏族の名があります。

そして、46 節以降ですが、「宮に仕えるしもべたち」とあります。彼らは、イスラエル人が戦って捕虜として連れてきた者たち、あるいはギブオン人であると考えられています。ギブオン人は、主の宮において、水を汲み、たきぎを割る者たちとして、ヨシュアの時に定められた者たちです。レビ人が行う奉仕で、このような肉体労働を使役された者たちと考えられます。57 節以降は、「ソロモンのしもべたちの子孫」とありますが、ソロモンが神殿を建てる時に呼ばれたツロの技術者であるとか、その時からの子孫であると考えられます。そして 61 節は、アロン系であることの証明ができず、祭司の務めはできない者たちの名前です。これは大事ですね、いつの間にかその人たちの息子や孫がネヘミヤの時代に祭司をしてしまうかもしれませんから、はっきりさせるべきです。

そして 66 節以降に、全集団の合計が書かれています。4 万 2 千 360 名ですが、その他の男女の奴隷がおり、また歌うたいもいます。

このように系図がありますが 5 節に戻りますと、この記載をさせたのは神ご自身であることが書

かれています。神がネヘミヤの心を動かして、そうさせたとあります。旧約聖書では、系図が非常に重んじられています。それは創世記 3 章 15 節の、「女の子孫」の預言があるからです。ユダヤ人にはメシヤを輩出する大きな使命がありました。また彼ら自身が、アブラハムに与えられた契約によって、契約の民であることを確認する使命がありました。ですから、系図を残すということは、信仰の継承そのものであったのです。

私たちも、それぞれの名が小羊のいのちの書に書き記されていることを確認する必要があり、贖いの日のために聖霊の証印を押されていることを確認する必要があります。そして、何としてでも、信仰を継承するのです。西日暮里バイブルスタディにおいて、先週、ヘブル書 11 章を読み終わりました。天地創造を書いたモーセから始まり、アベル、エノク、ノア、族長たち、そしてモーセ、ヨシュア、そして士師たち、王ダビデ、そして預言者たちと、彼らがしたことがみな信仰によるものだ、と著者は力を込めて語っています。そして、新約時代のユダヤ人信者たちに、「このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまとわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。(12:1)」と続くのです。決して個人信仰に陥らないでください。この教会だけを見ないでください。今、この日本に、この時代に置かれており、そして自分の信仰の継承が神の国の拡がりの中で、確かな部分を占めていることに気づいてください。

3B 礼拝への準備 69-72

69 節から 71 節には、神殿の工事のため、また神殿の奉仕に使うもののために捧げ物をした者たちの名が書き記されており、72 節を読みます。

7:72 こうして、祭司、レビ人、門衛、歌うたい、民のある者たち、宮に仕えるしもべたち、および、すべてのイスラエル人は、自分たちのもとの町々に住みついた。イスラエル人は自分たちの町々にいたが、第七の月が近づくと、

エズラ 2 章に書かれていた系図をそのままつなげて、自分たちの話にしています。第一次帰還民がそれぞれの、バビロン捕囚の前にいた自分たちの町に帰りましたが、それから第七の月が近づいて集まり、モーセの律法に書かれているとおり祭壇に全焼のいけにえを捧げた、とエズラ記 3 章の初めに書かれています。そして今、ネヘミヤの時代に同じように今、城壁再建の工事が終わってそれぞれの町に戻ったけれども、同じように第七の月になったらエルサレムに集まってきました。工事が終わったのがエルルの月の二十五日で 9 月 20 日頃で、第七の月は十日後です。

2A 律法の朗読 8

1B 律法の理解 1-12

8:1 民はみな、いっせいに、水の門の前の広場に集まって来た。そして彼らは、主がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って来るように、学者エズラに願った。

新改訳は直訳を採用すべきだったと思います。新共同訳は、「民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。」と訳しています。一斉に、と書かれているのではなく、一人の人のようになったというのが直訳です。これは神が願われていることです。敵はこれを破壊しようと躍起になっています。イエス様が十字架に付けられる前に祈られたのが、一つになることであり、使徒たちが教会に宛てた手紙のほとんどが御霊の一致を保つように、というものでした。

ゼルバベルの時代も、大祭司ヨシュアが率いて、モーセの律法の書に従って祭壇でいけにえを捧げましたが、今度はイスラエルの民自らが祭司であり学者であるエズラに対して、律法の書を持ってくるように願ったのです。一人一人の魂が生ける神に飢え渴いています。そして、神の言葉こそが自分たちに絶対に必要なものであることを、彼ら自身が知っていました。ひとりの人のようになったということは、誰の意見が正しいかどうかという競争やねたみが何一つない、完全に主権的な御霊の働きです。イエスが主として強く現れてくださる時、私たちはただこの方の前にひれ伏して、自分の罪を悲しみ、悔い改めて、この方のみがほめたたえられるようになります。これを、リバイバル、あるいは霊的復興、あるいは霊的覚醒としばしば呼ばれます。

ところで、水の門は、ダビデの町のギホンの泉の辺りにある門です。そこに広場がありました。

8:2 そこで、第七の月の一日目に祭司エズラは、男も女も、すべて聞いて理解できる人たちからなる集団の前に律法を持って来て、8:3 水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで、男や女で理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな、律法の書に耳を傾けた。

第七の月の一日目は、レビ記 23 章によると、ラツパを吹き鳴らす日です。神による清算が始まります。そして民の贖罪が行われる贖罪日が十日にあり、神の約束にあずかったことを喜び、楽しむ仮庵の祭りが十五日から始まります。この時、第七月の一日にすべての人々が集まりました。

男性も女性も関係なく、そして理解できる人々というのは、基礎的な国語の能力を持っている人々ということです。つまり小学生高学年ぐらいの年齢であればそこに参加していたことでしょう。驚きますね、小学生には聖書の話は分からないと思っている人は、おそらく小学生でも分かる聖書の話をも自分で分からないことを宣言しているようなものです！むしろ小さな子たちのほうが、霊的知識においては優れています。神の言葉を自分の頭で理解するのではなく、権威ある、従うべき言葉、頼るべき言葉であることを知っているからです。

そして「夜明けから真昼まで」行っています。一日の四分の一、6 時間ぐらいは費やしていたことでしょう。もちろん説教が長ければよいというものではないですが、聖霊が強く働かれる時は、神のこぼれを聞くのに疲れることはありません。そして大事なものは、「朗読した」というところです。後で説明が出てきますが、これは単純に音読したということではありません。他に彼を助けるレビ人や祭司がいて、それを説明していきます。エズラが大きな声で読み、はっきりと読み、それから少

し合間をおいて、レビ人たちがそれに少しの説明を付けて話していったのかもしれませんが。これを現代の教会では、「聖書講解」といいます。解き明かしながら、聖書を講読していくということです。そして民は、「律法の書に耳を傾けた」とあります。エズラの言葉ではなく、神の言葉に耳を傾けました。聖書の言葉そのものに何が書かれているのか、それを理解するのに意識が集中していたということです。

8:4 学者エズラは、このために作られた木の台の上に立った。彼のそばには、右手にマティテヤ、シエマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが立ち、左手にペダヤ、ミシャエル、マルキヤ、ハシュム、ハシュバダナ、ゼカリヤ、メシュラムが立った。8:5 エズラはすべての民の面前で、その書を開いた。彼はすべての民よりも高い所にいたからである。彼がそれを開くと、民はみな立ち上がった。8:6 エズラが大いなる神、主をほめたたえようと、民はみな、手を上げながら、「アーメン、アーメン。」と答えてひざまずき、地にひれ伏して主を礼拝した。

なんというすばらしい光景でしょうか。エズラが台の上に立ったのは、彼が目立つためではなく、彼がたしかに律法の巻き物を開くのを民が直接、見るためでありました。民がこれから聞くのは、神の言葉そのものであることを目で見て、確かめるようにさせたのです。宗教改革後に建てられた教会を、ヨーロッパで見ることができます。ルターも、スポルジョンも二階から御言葉を取り次いでいる絵が残っています。

そしてエズラが大いなる神、主をほめたたえました。当時の人々は、躍動的に応答しています。手を上げて、「アーメン、アーメン」と答えて、さらにひざまずいています。そして主を礼拝しました。今のイスラム教徒が頭を地面につけてひれ伏して礼拝しますが、むしろ彼らの方が聖書の習慣に倣っています。

大事なものは、律法を朗読するのと、主をほめたたえ、礼拝することが切り離されていない事です。私たちは二つの過ちを犯しています。一つは、聖書を学びのために行っていることです。日本は武士道という文化があるためか、無教会を始めた内村鑑三は聖書研究を中心として集まりを展開させました。しかし、神の言葉を読むということはそのまま、神へ礼拝を捧げることにつながらなければ意味がありません。人格ある神ご自身に自分自身が心動かされなければいけません。もう一つは、その反対で御言葉無しの礼拝です。これも成り立ちません。詩篇 138 篇 2 節には、新共同訳で読みますが、「その御名のすべてにまさって／あなたは仰せを大いなるものとされました。」とあります。神ご自身がご自分の言葉を、ご自分の名の全てに優って大いなるものとされたのです。礼拝の中で御言葉を語るということは、神の名を大いにほめたたえることと同じです。

8:7 ヨシュア、バニ、シェレベヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、エホザバデ、ハナン、ペラヤなどレビ人たちは、民に律法を解き明かした。その間、民はそこに立っていた。8:8 彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解し

た。

新改訳では、「はっきりと読んで説明した」となっているところは、新共同訳では、「神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げた」であり、口語訳では、「神の律法をめいりょうに読み、その意味を解き明かして」とあります。そこに書かれていることが明瞭になるようにして読んでいきます。まさに、私たちはこのことを礼拝で行っています。御言葉が高められるところで、しかも理解なしの音としての朗読ではなく、理解しながら読まれていくことによって、神の名がほめたたえられるのです。

ところで聖書解説なんていう言葉がありますが、ちょうど古典の解説のようにして読んでいく方法ですが、私はそのような読み込みが好きではありません。一つの方法でしょうが、それが目的であるかのように聖書を読むのが好きではないのです。なぜなら、聖書の物語そのものに美しい流れがあるからです。一冊で一つの話なのです。その話そのものが、人々に神のメッセージを伝えます。ここでエズラの読む律法を聞いているイスラエル人だけが、朗読を聞いていたのではありませんでした。初代教会の聖徒たちは、一人一人が聖書を持っていたわけではありません。長老に渡された写本の巻き物があり、長老はそれを読み聞かせ、聖徒たちに教えていたのです。

8:9 総督であるネヘミヤと、祭司であり学者であるエズラと、民に解き明かすレビ人たちは、民全部に向かって言った。「きょうは、あなたがたの神、主のために聖別された日である。悲しんではならない。泣いてはならない。」民が律法のことばを聞いたときに、みな泣いていたからである。8:10 さらに、ネヘミヤは彼らに言った。「行って、上等な肉を食べ、甘いぶどう酒を飲みなさい。何も用意できなかった者にはごちそうを贈ってやりなさい。きょうは、私たちの主のために聖別された日である。悲しんではならない。あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。」

エズラが朗読して、レビ人たちが解き明かしている中で、人々が泣いているのに彼らは気づきませんでした。これは午前礼拝で話しましたように、律法に書かれていることを自分たちが行ってこなかったという悔いであります。そして、自分たちが背いてきたから、今、苦しみの中にいるのだという悲しみもあるでしょう。しかし、「きょうは、主に聖別された日だ」と言って彼らは民に励ましをしました。確かに、その日はラッパを吹き鳴らす日であり、安息の日です。この時には主に対して祭りをする時であり、主を喜ぶ日であります。

二つのことが言えます。一つに、罪に対する悲しみがなく、楽しんでいる人、笑っている人は悲しまなければなりません。罪に対して泣く必要があります。もう一つは、罪に悲しみ、悔い改めている人は大いなる慰めがあります。泣いてはいけません。神の憐れみと慈しみを受けて、主にあって喜ぶのです。

エズラやレビ人は聖書を教える者たちですが、ネヘミヤが彼らの教えていることを実行させるた

めに、具体的に食事を、祝宴をもって主を喜ぼうではないかと勧めています。新改訳は、「あなたがたの力を主が喜ばれる」と訳していますが、別訳には「主を喜ぶことは、あなたがたの力であるから」と訳されています。

8:11 レビ人たちも、民全部を静めながら言った。「静まりなさい。きょうは神聖な日だから。悲しいではない。」8:12 こうして、民はみな、行き、食べたり飲んだり、ごちそうを贈ったりして、大いに喜んだ。これは、彼らが教えられたことを理解したからである。

すばらしいですね、主を喜びました。これは御言葉を理解したからだ、とあります。そうです、再び繰り返しますが、主の裁きよりも主の慈しみのほうが優っています。確かに、自分たちは罪を犯しました。しかし、主の憐れみは豊かであり、罪を赦し、罪を忘れてくださるだけでなく、この罪人を神はご自分の宝の民として尊んでくださるのです。多くの人が、自分の行ないだけを見て、イエス様から立ち去ってしまいます。あの金持ちの青年のように、自分がイエス様の命令を守れないということで、暗い顔つきになり立ち去ってしまうのです。いいえ、罪を悔いているその砕かれた魂を神はこよなく愛しておられます。だから、そのままの自分で神を大いに喜ぶのです。

2B 律法の実行 13-18

8:13 二日目に、すべての民の一族のかしらたちと、祭司たち、レビ人たちは、律法のことばをよく調べるために、学者エズラのところに集まって来た。8:14 こうして彼らは、主がモーセを通して命じた律法に、イスラエル人は第七の月の祭りの間、仮庵の中に住まなければならない、と書かれているのを見つけ出した。

彼らは律法の朗読だけをするに留まりませんでした。律法を調べていきました。この時は、律法は全ての人の手に渡っているのではないので、民の一族の代表者だけが来て、そして祭司とレビ人が集まって、学者エズラが調べていきました。すると、レビ記 23 章にあるように、第七の月の十五日に、仮庵の祭りがあり、その時は仮庵の中に七日か住まなければいけないことを見つけました。彼らの興奮が伝わってきます。自分たちで調べて、それで神の御心を知ることができました。

ここを読むと、使徒の働きにあるペレヤの人々のことを思い出します。「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。(使徒 17:11)」パウロはもちろん、律法と預言書から論じました。「そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです。」(17:3)」はたして、その通りかどうか聖書で調べたのです。詩篇 22 篇を読んだことでしょうか。キリストの十字架の苦しみ書かれています。詩篇 16 篇 10 節を読んだことでしょうか。聖なる者が墓の中にとどまることはないという預言があります、これはキリストの復活の預言です。これまで気づかなかったこうした箇所に出会い、確かにその通りに信じていかなければいけないのだとペレヤの人々は思ったのです。

8:15 これを聞くと、彼らは、自分たちのすべての町々とエルサレムに、次のようなおふれを出した。「山へ出て行き、オリーブ、野生のオリーブの木、ミルトス、なつめやし、また、枝の茂った木などの枝を取って来て、書かれているとおりに仮庵を作りなさい。」8:16 そこで、民は出て行って、それを持って帰り、それぞれ自分の家の屋根の上や、庭の中、または、神の宮の庭や、水の門の広場、エフライムの門の広場などに、自分たちのために仮庵を作った。8:17 捕囚から帰って来た全集団は、仮庵を作り、その仮庵に住んだ。ヌンの子ヨシュアの時代から今日まで、イスラエル人はこのようにしていなかったの、それは非常に大きな喜びであった。

イスラエルの人々は、この仮庵に住むということはずっとしていなかった、いや、やってこなかったのでしょう。祭りを祝いはしたけれども、律法に書かれていることの通りに、イスラエル人がこぞって仮庵に七日間住むということはやってこなかったのだと思います。だから、彼らにとっては全く新しい試みです。しかし、主がそう言われているのだからという理由で、彼らはそれを実行したのです。それで、彼らの中に「非常に大きな喜び」があったとあります。

私たちは、確かに聖書が神の靈感によって書かれたものだ、聖霊によって動かされた人々が書かれたことだと信じています。しかし、自分たちがこれまでまるで行ってこなかったという命令を聖書に見つかる時、それを行えば、そこに喜びがあります。神を愛している者は、キリストの戒めを守るところにこそ、大いなる喜びがあります。ですから、私たちが喜びに満たされるためには、まず御言葉を聞かなければいけません。そして御言葉をそのとおりに信じなければいけません。そして、その御言葉に留まり、喜ばなければいけません。そして御言葉を実行するのです。

そして神の恵みはとてつもなく大きいです。仮庵の祭りとは、四十年の荒野の旅を経て、その間神が彼らを荒野で守ってくださったこと、無事に約束の地に導いてくださったことを祝うものであります。神の御国の幻では、これはキリストが再臨されて神の国において祝宴を持つことを表していますが、この祭りをヨシュアの時以来、このように守られたことがないということです。つまり、約束の地から彼らはバビロンによって引き抜かれましたが、ヨシュアが約束の地に入ってきて以上の祭りになった、ということでもあります。これこそ、溢れ流れる恵みであります。「罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」

8:18 神の律法の書は、最初の日から最後の日まで、毎日朗読された。祭りは七日間、祝われ、八日目には定めに従って、きよめの集會が行なわれた。

仮庵の祭りにしたがえば、その七日間、また八日目にも、それぞれの日にいけにえを捧げることになっています。おそらく彼らは行ったと思いますが、この時に特筆すべきなのは、律法の書が読まれていったということです。「聖書の戻る」ということが、エルサレムを城壁のみならず、靈的に堅固にする方法だったのです。

3A 神への告白 9

1B 神への礼拝 1-5

9:1 その月の二十四日に、イスラエル人は断食をし、荒布を着け、土をかぶって集まった。9:2 そして、すべての外国人との縁を絶ったイスラエルの子孫は立ち上がって、自分たちの罪と、先祖の咎を告白した。9:3 彼らはその所に立ったままで、一日の四分の一は、彼らの神、主の律法の書を朗読し、次の四分の一は、告白をして、彼らの神、主を礼拝した。9:4 ヨシュア、パニ、カデミエル、シェバナヤ、ブニ、シェレベヤ、パニ、ケナニは、レビ人の台の上に立ち上がり、彼らの神、主に対し大声で叫んだ。9:5 それからまた、レビ人のヨシュア、カデミエル、パニ、ハシャブネヤ、シェレベヤ、ホディヤ、シェバナヤ、ペタヘヤは言った。「立ち上がって、とこしえからとこしえまでいますあなたがたの神、主をほめたたえよ。すべての祝福と賛美を越えるあなたの栄光の御名はほむべきかな。」

仮庵の祭りは第二十二日に終わりました。一日を挟んで、彼らは続けて律法の書によって神の取り扱いを受けていきます。御言葉を聞き、そして喜ぶ時を持ってから、これまでの罪を告白していく時を持ちました。断食、荒布、土をかぶることは、悲しみと嘆きを表します。そして、彼らがバビロン捕囚の原因となった最も大きな要素、外国人と結婚したために偶像に仕えるようになった、そのことを悔い改めて、その縁を立ったイスラエル人が自分の罪と、先祖の罪を告白しました。

具体的には、一日の四分の一、つまり六時間は律法の朗読に、それから六時間は告白と礼拝に捧げたとあります。ここでの「告白」は必ずしも、自分の至らなさを言い表すだけではありません。神のすばらしさと慈しみも言い表していきます。これを六節から読むことができますが、日本語で人間的な表現を使うならば、「有体に話していく」ということです。神ご自身を神ご自身として見ていき、また同時に、その神の前で自分たちがどうなっていたかも有体に話していくことです。

彼らはまず、主の御名を大声で叫んで賛美しました。彼らの心は、律法に示されている神のすばらしい御名、そのご性質をほめたたえざるを得ませんでした。

2B イスラエルの歴史 6-37

そして彼らの告白は、6 節からなんと 37 節まで続きます。その中身は、ほとんどがイスラエルの歴史そのものであります。彼らが律法の朗読で聞いてきたことを、そのまま主に対して話しています。聖書を通読すれば分かるでしょうが、モーセがイスラエルの歴史をそのまま話しました。そしてヨシュアも話しました。祈りの中で、ダニエルが悔い改めをして、同じように話していきました。そして、新約時代に入れば、パウロが小アジアにある会堂で、イスラエルの歴史を話しました。そして有名なのは、ステパノのサンヘドリンにおける説教です。彼はアブラハムから始めて、ソロモンの神殿のところまで話しました。ヘブル書 11 章は、やはり旧約の聖徒たちの歴史をたどっている説教になっています。

なぜ、そのように話すのか？それは、先ほど申し上げたとおり、その話そのものに神の語りかけがあるからです。その話そのものに、神ご自身の栄光、ご性質、そして神の民とされたイスラエルのありのままの姿が現れているからです。その歴史を自分自身も追体験しながら、そして自分の立ち位置を、今いるところを確かめるのです。

1C 主の真実に応えない民 6-31

9:6 「ただ、あなただけが主です。あなたは天と、天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、そのすべてを生かしておられます。そして、天の軍勢はあなたを伏し拝んでおります。9:7 あなたこそ神である主です。あなたはアブラムを選んでカルデア人のウルから連れ出し、彼にアブラハムという名を与えられました。9:8 あなたは、彼の心が御前に真実であるのを見て、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、エブス人、ギルガシ人の地を、彼と彼の子孫に与えるとの契約を彼と結び、あなたの約束を果たされました。あなたは正しい方だからです。

主のすばらしさを、天地創造のところから話していきます。モーセの律法はもちろん、天地創造から始まります。そして次に、アブラハムに対して約束を語ります。この方が正しい方だ、と言っています。約束を守る真実な方だ、ということです。ここでこのレビ人たちの祈りの中心は、「主が私たちに良くしてくださっている」ということです。天地創造において、もちろん人間がそこに介入して神と創造の働きを手助けした、ということはありません。もっぱら神ご自身の働きであり、人間がそれに貢献したものはありません。そして、アブラハムを選ばれて、約束の地を確かに与えられたというのも、神ご自身が専ら行われたことです。

9:9 あなたはエジプトで私たちの先祖が受けた悩みを見、また、葦の海のほとりでの彼らの叫びを聞かれました。9:10 あなたは、パロとそのすべての家臣、その国のすべての民に対して、しるしと不思議を行なわれました。これは、彼らが私たちの先祖に対して、かつてなことをしていたのをあなたが知られたからです。こうして、今日あるとおり、あなたは名をあげられました。9:11 あなたが彼らの前で海を分けたので、彼らは海の中のかわいた地を歩いて行きました。しかし、あなたは、奔流に石を投げ込むように、彼らの追っ手を海の深みに投げ込まれました。9:12 昼間は雲の柱によって彼らを導き、夜は火の柱によって彼らにその行くべき道を照らされました。9:13 あなたはシナイ山の上を下り、天から彼らと語り、正しい定めと、まことの律法、良きおきてと命令を彼らにお与えになりました。9:14 あなたの聖なる安息を彼らに教え、あなたのしもべモーセを通して、命令とおきてと律法を彼らに命じられました。9:15 彼らが飢えたときには、天からパンを彼らに与え、彼らが渴いたときには、岩から水を出し、こうして、彼らに与えると誓われたその地を所有するために進んで行くよう彼らに命じられました。

主は、約束のみならず、実際の贖いの業においても真実な方でした。エジプトにおいて災いを下し、紅海を分けて、そしてシナイ山で聖なる律法を与え、荒野での旅でマナを与え、岩から水を出

されました。主が贖い、また備えをしてくださることにおいて、こんなにも良くしてくださいました。

9:16 しかし、彼ら、すなわち私たちの先祖は、かつてにふるまい、うなじをこわくし、あなたの命令に聞き従いませんでした。9:17 彼らは聞き従うことを拒み、あなたが彼らの間で行なわれた奇しいみわざを記憶もせず、かえってうなじをこわくし、ひとりのかしらを立ててエジプトでの奴隷の身に戻ろうとしました。それにもかかわらず、あなたは赦しの神であり、情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かであられるので、彼らをお捨てになりませんでした。

神の真実と慈しみに、イスラエルの民は応答しなかったことを告白しています。ここで話しているのは、もちろんカデシュ・バルネアでの出来事です。そこで彼らが不信の罪を犯しました。しかし、ここでレビ人たちが心に深く刻んでいるのは、神の御名であります。モーセが主の栄光の後姿を見た時に、主がご自分の名を宣言されたのが、これです。「情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かであられる」主なる神は、彼らを滅ぼす正当な権利を持っていました。しかし、彼らをお捨てにならなかったのは、情け深さ、憐れみの深さ、怒りの遅さ、そして恵み豊かさであるのです。

9:18 彼らが自分たちのために、一つの鑄物の子牛を造り、『これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神だ。』と言って、ひどい侮辱を加えたときさえ、9:19 あなたは、大きなあわれみをかけ、彼らを荒野に見捨てられませんでした。昼間は雲の柱が彼らから離れないで、道中、彼らを導き、夜には火の柱が彼らの行くべき道を照らしました。9:20 あなたは、彼らに悟らせようと、あなたのいつくしみ深い霊を賜わり、彼らの口からあなたのマナを絶やさず、彼らが渴いたときには、彼らに水を与えられました。9:21 四十年の間、あなたは彼らを荒野で養われたので、彼らは何も不足することなく、彼らの着物もすり切れず、足もはれませんでした。

再び、神の慈しみの現われを告白しています。金の子牛のことで神に背いたのに、大きな憐れみをかけて、荒野でお見捨てになりませんでした。続けて雲の柱、火の柱で導いてくださり、彼らに慈しみの霊を賜り、マナも与え、水も与えられました。そして、なんと四十年の旅であったのに、着物は擦り切れることなく、足もはれませんでした。こんなにも憐れみ深い方なのです。

彼らの悔いは何か分かりますか？ 18 節に、「ひどい侮辱を加えた」と言っています。彼らの悔い改めは、神を傷つけたことなのです。しばしば私たちは、神から災いが下るのではないかという恐れをもって神を見ます。午前中も学びましたが、それは自分中心の表面的な謝罪であり、状況がよくなれば元に戻ります。しかし、真の悔い改めは、自分が傷を受けるのではないかという恐れではなく、神を傷つけてしまったという悔いであります。16 節でも同じです、「かつてにふるまい、うなじをこわくし」と神に対する痛みを話しています。

9:22 あなたは彼らに王国や国々の民を与え、それらを領地として割り当てられました。こうして、

彼らはシホンの地、すなわちヘシュボンの王の地と、バシヤンの王オグの地を占領しました。9:23 あなたは彼らの子孫を空の星のようにふやし、彼らの先祖たちに、はいつて行って所有せよ、と言われた地に、彼らを導き入れられました。9:24 こうして、その子孫は、はいつて行って、その地を所有しました。あなたは、彼らの前でこの地の住民、カナン人を屈服させ、これを彼らの手に渡し、その王たちや、この地の人々も渡して、これを思いどおりに扱うようにされました。9:25 こうして、彼らは城壁のある町々と、肥えた土地を攻め取り、あらゆる良い物の満ちた家、掘り井戸、ぶどう畑、オリーブ畑、および果樹をたくさん手に入れました。それで、彼らは食べて、満腹し、肥え太って、あなたの大きいなる恵みを楽しみました。

荒野の旅で慈しみを示された主は、ヨルダン川東岸における敵に対する大勝利、そして約束の地に入ったあとの勝利、さらにその豊かな地で満ち溢れることまで導かれました。主は私たちを贖い、私たちを守り備えるだけでなく、勝利を与え、豊かにしてくださいます。

9:26 しかし、彼らは反抗的で、あなたに反逆し、あなたの律法をうしろに投げ捨て、あなたに立ち返らせようとして彼らを戒めたあなたの預言者たちを殺し、ひどい侮辱を加えました。9:27 そこで、あなたは彼らを敵の手に渡され、敵が彼らを苦しめました。彼らとその苦難の時にあなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あなたの大きいなるあわれみによって、彼らに救う者たちを与え、彼らを敵の手から救ってくださいました。9:28 しかし、ひと息つくと、彼らはまた、あなたの前に悪事を行ないました。そこで、あなたは彼らを敵の手にゆだねられ、敵が彼らを支配しました。しかし、彼らが立ち返って、あなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あなたのあわれみによって、たびたび彼らを救い出されました。

士師の時代に入りました。これまでの「主の慈しみ」に対して、「民が反抗する」という繰り返し、ここでは頻繁に起っています。したがって、神は一度、二度ではなく、何度でも救いの手を伸ばしてくださいます。そして民は、主に良くしてもらったのに、何度でも神に反逆するということです。

9:29 あなたは彼らを戒めて、彼らをあなたの律法に立ち返らせようとされましたが、彼らはかつてなふるまいをして、あなたの命令に聞き従わず、もし人がこれを行なうなら、これによって生きる、というあなたのためにそむいて罪を犯し、肩を怒らして、うなじをこわくし、聞き入れようとはしませんでした。9:30 それでも、あなたは何年も彼らを忍び、あなたの預言者たちを通して、あなたの霊によって彼らを戒められましたが、彼らは耳を傾けませんでした。それであなたは、彼らを国々の民の手に渡されました。9:31 しかし、あなたは大きいなるあわれみをかけて、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らを捨てられませんでした。あなたは、情け深く、あわれみ深い神であられますから。

士師の時代以降、サウル、ダビデ、そしてソロモンの王国時代の後、南北に分裂した時の歴史を思い出しています。それでも彼らは聞き従いませんでした。その悔いが再び強く表れています。

「そむいて罪を犯し、肩を怒らして、うなじをこわくし、聞き入れようとはしませんでした」と言っています。そして、神も何年もかけて彼らを忍ばれたことも告白しています。預言者たちがこの時代たくさん出てきましたが、それは神の忍耐の表れでした。

そこでようやく、神が国々の手に彼らを渡されたという告白をレビ人はします。ここからが直接、自分の時代に関わる事です。北イスラエルはアッシリヤによって、南ユダはバビロンによって捕え移されました。ところが、この裁きの中にさえも、見てください、主は彼らを滅ぼしつくされなかったのです。自分たちがまさにその生き証人です。そして、主がモーセに現されたご自分の名、情け深く、憐れみに富むその神であるということを告白しています。

彼らの悔い改めとは、どこにありますか？彼らの告白している神に対する責任は何でしょうか？それは、*神の慈しみに対する責任*です。パウロが言いました。「神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじるのですか。(ローマ 2:4)」イスラエルの民が犯していた罪は、この罪です。神の慈しみの深さに対して、感謝せず、神をあがめず、自分の欲望に任せて動いた罪であります。

2C 懲らしめの中にいる民 32-37

9:32 私たちの神、契約と恵みを守られる、大いなる、力強い、恐るべき神よ。アッシリヤの王たちの時代から今日まで、私たちと私たちの王たち、私たちのつかさ、祭司、預言者たち、また、私たちの先祖と、あなたの民全部に降りかかったすべての困難を、どうか今、小さい事とみなさないでください。

ここで初めて、レビ人たちは今の状況に対して憐れみを請っています。

9:33 私たちに降りかかって来たすべての事において、あなたは正しかったのです。あなたは誠実をもって行なわれたのに、私たちは悪を行なったのです。9:34 私たちの王たち、つかさたち、祭司たち、先祖たちは、あなたの律法を守らず、あなたの命令と、あなたが彼らに与えた警告を心に留めませんでした。9:35 彼らは、自分たちの王国のうちと、あなたが彼らに与えたその大きな恵みのうちに、また、あなたが彼らの前に置かれた広くて肥えた土地のうちにありながら、あなたに仕えず、また自分たちの悪い行ないから、立ち返りもしませんでした。

憐れみを請いましたが、今の苦しみについて神には全く非がないことを告白しています。そこで再び、自分たちが律法を守らなかった、命令や警告に心を留めなかった。イスラエルの王国があったのに、その恵みがあつたのに、この肥えた約束の地があつたのに、その恵みに応答して悪い行いから立ち返らなかった、と告白しています。

9:36 ご覧ください。私たちは今、奴隷です。あなたが私たちの先祖に与えて、その実りと、その良

い物を食べるようにされたこの地で、ご覧ください、私たちは奴隷です。9:37 私たちが罪を犯したので、あなたは私たちの上に王たちを立てられました、その王たちのために、この地は多くの収穫を与えています。彼らは私たちのからだ、私たちの家畜を思いどおりに支配しております。それで私たちは非常な苦しみの中におります。」

5章において、王に支払う税が重くなっていて、息子や娘を身売りにしなければならなくなったという叫びを読みましたが、彼らはペルシヤに対する貢物によって非常な苦しみを受けていました。主をこのことに目を留めてください、という祈りで終わっています。そこで次の行動に出ました。

3B 盟約 38

9:38 これらすべてのことのゆえに、私たちは堅い盟約を結び、それを書きしるした。そして、私たちのつかさたち、レビ人たち、祭司たちはそれに印を押した。

彼らは、これだけ主が良くしてくださったことに対して、その応答として盟約を結びました。まずその記録にそれぞれ代表者が署名します。そして、モーセの律法を守り行うことについて、その具体的な約束がそこには書き記されています。その中身については、10章に書かれていますので、次回学びます。

ユダヤ人たちは、イスラエルの歴史から主の慈しみを告白しました。そして、その慈しみと恵みがないがしろにしたことを告白しました。今の時代の私たちには、神はこう語られます。「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。(ローマ 3:25)」神は、最後の、究極の、慈しみと恵みを公にされました。それがご自身の御子、イエス・キリストのなだめの供え物です。ここにおいて、神はご自分の正義を明らかにされました。ここにおいて、神は一切の罪に対する罰を下されました。

ですから私たちの告白は、この十字架をないがしろにしたことです。使徒パウロは、「ですから、ひとりひとりが吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。(1コリント 11:27)」と言いました。私たちは、神の義に対して責任を負っていません。御子の上に神はご自分の正義を、その全てを現されたのです。私たちは、この恵みに対して負い目を持っています。私たちは、この愛に対して負い目を持っています。

神の示された愛と恵みに対して、私たちがどこまで応答したでしょうか？ イエス様はペテロに、「わたしを愛しますか。」と尋ねられた時に、ペテロは「好きです。」と答えました。ギリシヤ語では、「わたしをアガベしますか。」と尋ねられた時に、ペテロは、「あなたをフィレオしています。」というように答えています。彼の愛が表面的になっていた、ということです。しかし彼がイエス様に従って、彼は確かにイエス様のように、いや言い伝えによると、主のように死ぬのはできないと言って、逆

さ磔で殉教しました。イエス様がそこまで自分にしてくださったのだから、私がどうして？という彼のイエス様への愛の表れです。

主の十字架の前に出る時は、その究極の慈しみと恵みに触れることになります。義によって裁ばれないことを神がお決めになりました。それなのに、私はまだ赦されていない、私はまだ自分で罪を償わなければいけない、あるいは、自分はそれほど悪いことをしていると認められていない、というのであれば、その人はまだ十字架の深みに入っていません。自分の罪を責めていることは、裏返すと、自分でまだ罪を贖えると思っていることの裏返しです。いいえ、その自分をキリストの前に持って行ってください。そこには、どんな罪でも、どんな悪と汚れでも、真っ白になるまで洗い流す血が溢れ出ているのです。